

ビーリア（ボノボ）保護支援会ニュースレター

2010年12月

ごあいさつ

ビーリア（ボノボ）保護支援会 代表 古市 剛史



E1グループの雄 モリ

早くも年の瀬を迎え、昨夏の酷暑を思い出すことも難しい今日この頃ですが、皆様いかにお過ごしでしょうか。

皆様の長年にわたるご支援により、ボノボの楽園の活動も、ワンバ村の野生ボノボの保護活動も、順調に進んでいます。

ボノボの楽園では、保護して育ててきたボノボの一部を、密猟などのためにボノボがほとんどいなくなってしまった森に放すプロジェクトを実施しました。ボノボたちは、予想をはるかに上回る適応力を見せ、森の中で自由な生活を送っています。地元との協力で密猟の防止などにも力を入れ、隣接する地域にもうひとつのグループを返す計画を進めています。

ワンバ村では、ボノボの数が順調な回復を見せはじめました。私たちが主として観察しているグループは、多くの子どもたちが生まれ、政治的混乱で激減する前の1991年ごろの個体数にほぼ届きました。当支援会で建設した診療所については、みずほ信託銀行が運営するアフリカ支援基金から100万円のご支援をいただくことができ、薬品や医療器具、手術用のベッドなどを送っています。また、本支援会内に設けたほがらか基金による奨学金支給も継続し、いよいよ大学を卒業する者が出ます。

今後とも、みなさんから寄せいただく寄付金を有効な形でボノボの保護に役立てるよう努めてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



イオンジ村、コミュニティ保護区設立へ向けて



坂巻哲也

2010年6月、私にとって5回目のワンバ村訪問。今回はワンバ村でのビーリアの調査の他に、隣接するイオンジ村の森でも調査を開始することになりました。

ワンバ村でのボノボ研究は1973年にはじまりました。1990年に、日本人研究者の働きにより、ワンバ村とルオー川をはさんで南に隣接するイロンゴ村の森を含めたルオー学術保護区が設立されました。

ワンバ村とイロンゴ村の東に隣接するのがイオンジ村の人々の森になります（写真）。以前からルオー保護区をイオンジ村の森へ拡張しようという計画がありました。2008年からは、ビーリア保護支援会として、その地域の森林警備にかかる経費を支援してきました。そして2009年、イオン

ルオー学術保護区とイオンジ・コミュニティ保護区予定地（衛星写真）
ジ村のもっとも西に位置する二つの集落、ヨハラとヨカリの人々が話し合い、かれらの森を自らが運営・管理するコミュニティ保護区にしようという計画が、自らの地元NGO、「ボノボの森（Forêt de Bonobo）」を中心に具体化してきました。

その活動を支援する形で、ビーリアが生息する赤道州で活発に自然保護と地域発展の支援を行なっているアフリカ野生生物基金（African Wildlife Foundation; AWF）が、米国野生生物部（U. S. Fisher and Wildlife Service）の資金を得ることが決まり、イオンジ・コミュニティ保護区設立へ向けた活動が本格的に始まりました。その際、ワンバ村でビーリア研究を続けている私たち日本人研究者に

AWF から技術協力の要請があり、私が中心となってその活動に協力することとなりました。

この活動における私の主な任務は、保護区予定地域の 1～2 群のビーリアの人づけ（人に馴らすこと）、ビーリアを含めた大型哺乳類の分布と生息数推定、人間活動の評価です。同時に、これらのモニタリングが地域住民によって継続的に行なえるように指導していくことも、私の任務の一つです。

今回の 2 ヶ月ほどの滞在中、ヨハラ・ヨカリの人々の中から 8 人の調査助手が選ばれ、ルオー川の南に広がる森の中に調査基地を設け、かれらとともに人づけの対象とするビーリアの遊動域を確認して、保護区予定地の全域にわたるモニタリングのためのトランセクト・ルートを作り始めました。

今年は再び 10 月からワンバ村とイヨンジ村に滞在し、この活動を行なっていきます。また、この活動の経過をお知らせしていきたいと思えます。

ABC (Amis des Bonobos du Congo) の 近況：動き始めたリリース計画

竹元博幸

2010 年 8 月、3 年ぶりに Lola ya Bonobo を訪れた。キンシャサ近郊の Matadi にあるビーリアのサンクチュアリだ。密猟等で親を亡くしたビーリアの孤児を引き取って、できるだけ自然状態で飼育し、いずれ野生に戻そうという趣旨で ABC が運営している。

今回まず驚いたのは、ナッツ割りを複数の個体がおこなっていたことだ。西アフリカのチンパンジーはアブラヤシや Panda の種子を石のハンマーや台石を用いて割り、中の栄養に富む胚乳を食べる。しかし野生ビーリアで観察されたことはない。ビーリアの生息地にはハンマーや台となる石が存在しないのだ。実験のため岩や石を導入し、ナッツ類をあたえると、自然にナッツ割りを覚えたという。類人猿の行動の柔軟さを示すものだ。

近いうちに野生に戻す個体を集めた放飼場にも入ってみた。餌を定期的にあたえる以外はほとんど野放しで、野生復帰への準備といったところだ。しかしまだ若い個体が多いせいか、近づいてきていろいろといたずらしてくる。幼いうちから人が身近にいる環境で暮らしてきたので、人に対する依存心が強いのだろう。実際、進行中の野生復帰計画では、2 頭が放たれた土地にうまく適応せず、もう一度野生生活に慣れる訓練をしておいているという。それ

でも 9 頭は新しい彼らのための森 (Ecolo ya Bonobo) で自立した生活を送っている。ABC の努力が実り始めているのだ。しかし問題は、未だに Lola ya Bonobo に運び込まれてくる若いビーリアが後を絶たないことだろう。



野生復帰のための放飼場で暮らす母仔



大きい岩を抱えてナッツ割りをする若いメス

寄付のお願い

ボノボの保護にご協力いただける方に寄付をお願いします。寄付金は、ボノボ孤児施設の支援および野生のボノボの保護に使われます。ただし、使い道のご希望があれば、孤児施設の支援、野生ボノボの保護などと通信欄にお書き添えください。

振込先 郵便振替 00820-7-128368
ビーリア（ボノボ）保護支援会

ゆうちょ銀行 ○八九店（ゼロハチキュウ店）当座 0128368

なお、ニュースレターをメールでお受け取りになりたい方は、振り込み書の通信欄にメールアドレスをご記入ください。

連絡先

〒484-8506 愛知県犬山市官林 京都大学霊長類研究所

ビーリア（ボノボ）保護支援会

Fax: (0568) 63-0565 E-mail: bonobo@mbd.nifty.com

ホームページ: <http://homepage3.nifty.com/bonobo/>